扇の的 ――「平家物語」から (2)

扇の的

与一は義経に命じられ、敵味方が見守る中、舟の竿先に付けられた扇の的を射ることとなった。

与一、※かぶらを取つてつがひ、※よつ引いてひやうど放つ。
かぶら矢を取って（弓に）つがえ、十分引き絞ってひょうと放つ。
小兵といふぢやう、※十二束三伏、弓は強し、
小兵ということで、（矢は）十二束三伏、（だが）弓は強い、
浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要際※一寸ばかりおいて、
（矢は）浦一帯に響くほど長いうなりを上げて、誤りなく扇の要の際から一寸ほど離れたところを、
ひいふつとぞ射切つたる。
ひいふっと　射切った。
かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。
かぶら矢は海に落ち、　扇は空へ舞い上がった。
しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、
（扇は）しばしの間は空中にひらめいていたが、
海へさつとぞ散つたりける。
さっと　散ったのだった。
夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、
夕日が輝いている中に、　真っ赤な扇で（金の）日輪が描かれているものが、白い波の上に漂い、
浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、舟端をたたいて感じたり、
浮いたり沈んだり揺られていたのを、　舟端をたたいて感嘆し、
陸には源氏、※えびらをたたいてどよめきけり。
えびらをたたいてはやし立てた。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、
感に堪えなかった（感動した）のかと見えて、
舟のうちより、①年五十ばかりなる男の、※黒革をどしの鎧着て、
舟の中から、　年が五十ほどの男で、
※白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。
持った者が、　扇の立ててあった所に立って　舞を舞った。
※伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、「御定ぞ、つかまつれ。」
与一の後ろへ（馬を）歩ませ近寄って、　御命令であるぞ、射よ。
と言ひければ、今度は②※中差取つてうちくはせ、
と言ったので、　中差を取って（弓に）つがえ、
よつ引いて、※しや頸の骨をひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。
十分引き絞って　男の頸の骨をひょうふっと射て、
平家の方には音もせず、
音もなく（静まり返り）、
源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。
「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。
心ないことを。

※かぶら…かぶら矢。かぶらは矢の先に付けると射たときに音が出る道具で、開戦の合図などに用いられた。
よつ引いて…よく引いて、という意味で、弓を十分に引き絞って。
十二束三伏…束は一握り（指四本分）、伏は指一本分の幅。　一寸…約三センチメートル。
えびら…矢を入れる道具。　黒革をどし…濃い色の革ひもで鎧の板をつづり合わせたもの。
白柄…木地のままで何も塗っていない白木の柄。　伊勢三郎義盛…義経に仕える重臣。
中差…えびらに差した矢のうち、戦闘用の矢。　しや頸…相手の首をののしって言う語。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　例に従って、次の言葉に含(ふく)まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に――線を引きなさい。

（例）さぬきの造(みやつこ)と［なむ］いひける

扇は空へぞ上がりける

(2)　本文に用いられている擬声語(ぎせいご)（擬音語）・擬態語のうち、次の音を表すものを選びなさい。

放たれた矢が風を切って飛び、勢いよく扇を射切った音。

ア　ひやう　**イ**　ひいふつ　**ウ**　ひやうふつ

〔　　〕

(3)　――線①「年五十ばかり……持つたる」とあるが、この人物は平家方と源氏方のいずれの人物か。適当なものを選びなさい。

ア　平家方　**イ**　源氏方

〔　　〕

(4)　――線②「中差取つてうちくはせ」の主語に当たる人物を選びなさい。

ア　与一　**イ**　年五十ばかりなる男　**ウ**　伊勢三郎義盛

〔　　〕

(5)　本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　与一が扇を射ると、かぶら矢はしばらく空にひらめいた。
イ　与一が扇を見事に射切ると、平家は静まり返った。
ウ　与一が男を射倒(いたお)すと、源氏は舟端をたたいてどよめいた。
エ　与一が男を射たことを、心ないことだと言う者もいる。

〔　　〕